

正解を定めない観察が教員養成課程における授業観察に及ぼす効果

山田雅彦（東京学芸大学）

1. 問題意識と課題

本研究の課題は、教員養成課程における授業観察について、学生に気づいてほしい教授行動、それに関連する児童・生徒の言動、その他大学の授業担当者が重要性を認識していない事象、の三者への気づきの関係を調査の結果をもとにして示すことである。

児童・生徒の言動は、教授行動を見直す重要な手がかりとなり、教師の力量と密接に関連することが指摘されてきた。しかし教員養成課程での授業観察においては、学生の関心が教師の教授行動（教具や課題の事前準備を含む）に集中し、児童・生徒の言動に関する気づきが乏しいことが指摘されている。しかも、教員養成課程における授業観察の実践では、事前に授業担当者から学生に提示される注目すべき点として教授行動のみが列挙されている、あるいは児童・生徒の言動のうち教師とかかわるものだけに言及されている例がある。児童・生徒の言動への気づきが、授業技術の向上に伴っておのずから実現されるのでない限り、児童・生徒の言動への気づきを促す方法が意図的に講じられる必要がある。

この点について、児童・生徒の言動への気づきに関する一連の研究は十分な示唆を与えるものではない。調査協力者の数がそれぞれの研究で十人前後にとどまっているため、児童・生徒の言動への気づきが教師の熟練度と関係していることは指摘されているものの、両者の具体的な影響関係（因果関係）についての説得力ある根拠を伴う考察には至っていないからである。

この関係の特定を待つまでもなく、観察の視点に児童・生徒の言動を加えることは不可能ではない。しかし、気づくべき言動を列挙された観察には、所定の言動を探し出すことと授業を観察することとを同一視し、そのチェックリストの作成者が言及しなかった重要事項をみずから発見しなくなるリスクが伴う。ひいては、授業のルーチンワークとしての側面への注目を促し、ルーチンワークに見える授業といえども各々固有の事情のある個性的な出来事であることへの気づきを遅らせるリスクをも伴う。その上、教育の場においては、見落とされかねない些事からも新たな経験則や授業技術が生まれることがある。まだ重要性が広く知られていない些事に気づくことは、その多くが無駄になるとしても新たな知を生み出す第一歩である。こうした些事に注目して状況を解釈する能力の育成も、多くの熟練教師が是とする観点や教授行動を早くから学んで授業観察力を能率的に向上させることとともに、教員養成課程の重要な課題である。

かくして、教員養成課程における授業観察をめぐっては、学生に気づいてほしい教授行動、それに関連する児童・生徒の言動、その他授業担当者が重要性を認識していない事象、の三者への気づきの関係を追究することが課題として見いだされる。本研究はそのような追究の過程として、授業観察の経験がほとんどない学部1年次生による授業動画視聴の際の観察結果に即して、三者への気づきの関係を追究するものである。

2. 研究方法

2017年11月に、教員養成学部の小学校教員養成課程に在籍する1年次生92名に協力を求めた。研究の趣旨、協力が任意であること、回答は匿名で処理されること、研究が完了するまで調査の内容について他言しないでもらいたいこと、を文書を配布して説明し、同意した63名(68.5%)から回答を得た。

観察対象とする授業の動画に、全国ダンス・表現運動授業研究会刊行のDVD(2011)から第1回の授業を選んだ。あわせて、注目すべき教授行動にとらわれない観察の結果をより強く反映した回答を得るために、正解となる解釈のない課題として、小林(2010)添付のCD-ROMに収載された、学校や家庭での子どもの生活風景をモチーフにしたイラストを使用した。いずれも著作権上の問題がないことを確認した。

教示文と記入用紙をA4片面印刷の冊子体にして配付し、イラストの観察とコメントの記入を求めた後、授業動画を再生して観察とコメントの記入を求めた。動画終了後に記入内容を補足する時間をもうけた後回収した。

動画については模倣または修正の対象として学生に気づいてもらいたい「要所」、要所と関連する生徒の言動「細部」、どちらにも属さない「その他」の3カテゴリーを設けて回答数を算出し、イラストへの回答を「イラスト」カテゴリーとして算出して、4カテゴリーの回答数の関係について共分散構造分析により分析した。

3. 結果と考察

「細部」から「要所」へ、ならびに「イラスト」から「細部」へ、有意な正のパス係数($p<.01$)が認められた。教授行動に関連した児童・生徒の言動(細部)に着目することが、今すぐ知るべき教授行動(要所)をみずから発見することに直接貢献する可能性が示された。対照的に、児童・生徒の言動への気づきは習得すべき授業技術を知ることでおのずから促されるわけではなく、意図的にその機会をもうける必要があること、しかもそのような機会をもうけることが、教授行動への気づきを促す可能性のあることが示された。

「イラスト」から「要所」への影響は、「細部」を介した間接的なものである。正解となる解釈のないイラストを見てより多くのことに気づくことが、動画視聴の際に児童・生徒の言動に気づくことを促し、その気づきをもとにしたみずからの解釈によって教授行動の適否を判断する、との仮説を立てることができる。授業やその動画の視聴による授業観察力向上の実践の「裾野」として、より多様な対象の観察が有効である可能性が示された。

参考文献

小林正樹 2010 『学校イラストカット CD-ROM①』 マール社
全国ダンス・表現運動授業研究会編 2011 『明日からトライ! ダンスの授業』 大修館書店

謝 辞

調査にご協力くださったみなさんに厚く御礼申し上げます。
本研究はJSPS 科研費 15K04213 の助成を受けたものです。